

氏名(本籍)	いわ <small>なが</small> <small>さち</small> <small>こ</small> 岩 永 幸 呼 (長崎県)
学位の種類	博 士 (デザイン学)
学位記番号	博 甲 第 3493 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	芸術学研究科
学位論文題目	自然解説施設のデザインに関する研究

主 査	筑波大学助教授	農学博士	鈴木 雅 和
副 査	筑波大学教授	工学博士	安 藤 邦 廣
副 査	筑波大学助教授	博士(工学)	花 里 俊 廣
副 査	筑波大学助教授	博士(農学)	横 張 真

論 文 の 内 容 の 要 旨

近年、自然保全活動や環境・自然教育が重要視されている。わが国では、国立公園に代表される自然公園において、ビジターセンターがその拠点施設として整備されている。また自然公園に限らず、都市公園内や里地において、体験学習を伴う環境教育、自然解説の場が整備されている。このような施設は、各省庁の直轄整備のものから、地方自治体、民間に至るまで多様な管理主体によって個々に整備されてきた。しかしこれらの施設の中には、運用が形骸化していわゆる箱物化している施設が多く、自然公園の施設では老朽化も進んでいることから、近年、建築施設の見直しも始まっている。

本研究は、自然公園において人の感性に訴えかけてその土地の自然を伝える様々な手法の総称であるインタープリテーション(自然解説活動)を行うための建築施設に関して、日米の歴史的な発達過程をふまえた上で、インタープリテーションからの視点に基づいたデザインのあり方について研究したものである。本研究の目的は、「インタープリテーション施設」がどのような歴史的背景を持つものかをまず文献を通じて明らかにすること。ついで、日本国内における施設の現状を把握し、問題点を明らかにすることによって、今後の日本のインタープリテーション施設に関するデザインの独自性と方向性を考察することである。

本論文の1章では、研究の背景・目的範囲について述べ、研究の枠組みを示し、本論の中心となる「インタープリテーション」の概念を整理した。近年、米国では「総合的なインタープリティブプランニング」が実践されており、そこには建築施設も位置づけられているが、わが国ではいまだそのような認識はないのが現状である。

2章では、米国国立公園の創始期における公園博物館のデザイン思想について述べた。創始期に建てられ、近年になって歴史的建造物として見直されている「公園建築」は、現地での解説を重視した、フィールドと一体になった建築であり、「ラスティックスタイル」という建築様式を築いた。それに関する資料集成は国立公園だけでなく、州立公園や、日本にまで強く影響を及ぼした。しかし、デザインの流れの背景を探ると、ラスティックスタイルは、日本の建築から影響を受けたアーツアンドクラフツ運動の建築様式でもあったことが明らかになった。

3章では、日本の自然公園における自然解説活動思想の変遷と施設整備の歴史について述べた。日本の自

然公園づくりにおけるインタープリティブデザイン思想と自然公園における建築施設整備の変遷を『国立公園』誌を中心に分析した。これにより、日本は米国国立公園からの影響を強く受けていることが明らかになった。本論で中心的に扱う、自然公園におけるインタープリテーション施設の中核となるビジターセンターも、米国のミッション 66 事業によって合理化されたセンター例を模倣したものであることがわかった。

日本人の自然観について、「国立公園」誌および関連文献を調査し、自然観論・風景論の変遷を明らかにした。自然を畏敬の念で崇めた日本人の自然観を再び見直し、心に響く、無理のないインタープリテーション手法を開発する必要があると考察した。

4 章では、日本の国立公園におけるビジターセンターの整備状況を把握した。また、国立公園に関する各種の統計情報の主成分分析を行い、各国立公園の特徴を数値化した。

5 章では、ケーススタディとして施設整備において最も歴史の古い、日光国立公園をとりあげた。ビジターセンターの分布、その他施設の分布等を時系列により把握した。各ビジターセンターに対して、立地、野外解説実施場所、運営内容、施設内容、建築デザインについてヒアリングを行った。また、建替えられた二つのビジターセンターについて、変更点を比較考察した。日光国立公園では国立公園指定以前から、様々な歴史があることから、日光の歴史を遡った。日光には遺産として残される多くの歴史的建造物や、自然と深く関った生活文化や、その生活に基づいて建てられた伝統的な建造物もあり、それらの分布状況を検討すると、地域の特徴を活かした解説活動の可能性が明らかになったが、現状ではほとんど活かされていないことがわかった。

6 章では、まとめと考察について述べた。まず、インタープリティブな建築の原点となる建築の計画思想を探った。公園建築は現地主義であり、土地の材料を用いて、自然の風景といかに調和させるかが、最も重要なテーマであったことが明らかになった。日本の自然公園では、地に根付いた、自然を敬う信仰があったにも関わらず、それを無視して、建築施設の形態のみを移入させたといえる。また、その移入時期は現在米国でも高く評価されていないミッション 66 事業の時代であったことが明らかになった。また、「国立公園」誌の文献調査から、自然解説、施設整備、日本人の自然観論・風景論の変遷が明らかになった。日本の国立公園は米国の影響を受けて整備されてきたが、米国型や西欧型の思考が必ずしも多くの日本人に合っていたとは限らず、地理的状况から見ても、ビジターセンターにおける解説活動だけでは無理があったと言える。むしろ、米国で日本の建築が引用されたことを考えると、自然を伝えるデザイン力は、日本に潜在的に備わっていると言える。今後は日本人の自然観を再び見直し、無理のないインタープリテーション手法を開発する必要がある。そのためには、既存の歴史的建造物なども視野に入れたインタープリテーションの計画運営と、さまざまなデザイン領域を複合的に用いるデザイン手法が必要となる。本論では、「インタープリティブデザイン」を「地域の自然や文化を伝える手法」の総称と定義づけ、その体系化と方法論のイメージを提示し、その方法論の開発と実施の必要性を提言した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、これまで建築家として野鳥観察施設などの建築設計を行ってきた著者が、あらためて自然解説のための建築デザインがどのようにあるべきかを、その発祥の原点に立ち返って考察したものである。これまで、自然公園におけるビジターセンターを中心とする自然解説施設について、その配置や機能について公園計画の視点からの研究はわずかながらあったが、建築デザインの視点から研究した事例は皆無に近かった。既往研究の少ない中で、文献を中心として米国のビジターセンターの発祥とその後の進展、そしてそれが日本に与えた影響について、両国の資料を時系列的に比較考察した結果、日本において自然解説施設の本来あるべき姿として必ずしも健全に発展したものではないことが明らかになった。また、日光国立公園における

ケーススタディにおいても自然解説施設の現状はインタープリティブデザインの観点からは満足のいくものではなく、総合的な計画と運営の再構築が必要であることが認識された。日本人の自然感に関する記述の変遷と日本の自然公園の特殊性から考察して、米国の自然解説施設の追随ではなく、日本の自然公園の制度が確立する以前の状況までも考慮したデザインの必要性を示唆できた。

本論文は、これまであまり体系的なデザイン対象として考えられていなかった自然解説施設について、インタープリティブデザインという新しいデザイン概念を提示することによって、地域の自然と文化を伝える手法として総合的に提案するという結論を導き出した。実際に現地においてその理念を実現するという検証過程は満たされていないが、これまで環境省・農水省・国土交通省あるいは地方自治体、民間がそれぞれ何の連携もなく事業を行った結果としての、自然解説施設の混乱した集積状況に対して、有用かつ具体的で、実現する意義のある提案をはじめて行ったものとして評価できる。また、現実的なデザイン方法論としては具体性がやや弱い面も見られるが、今後の研究課題として実践的に取り組まれることを期待する。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。